

西王母と桃の關係性

——不死の藥と仙桃・蟠桃——

若 林 步

序

西王母という神仙をご存じであろうか。西王母とは、中国固有の宗教である道教における、最上位の女神のことである。その神仙は女仙全てを支配したとされ、崑崙山を統治し、後世には不老不死の桃園を管理する麗しい天上の王母として絶大な信仰を集めた。

その信仰を示す一例として、「蟠桃會」が挙げられる。蟠桃とは西王母が持つていとされる、数千年に一度しか実らない、食べた者には不老長寿を与える桃のことである。その名を掲げた蟠桃會とは西王母を祀る祭であり、陰曆三月三日（桃花節）に行われる中国の年中行事の一つである。十六世紀に成立したかの有名な中国伝奇小説『西遊記』においても、蟠桃大会という名で西王母の生誕を神々が盛大に祝う場面が記されている。

西王母の持つ不老長寿を与える桃の存在や蟠「桃」會に見られるとおり、中国における西王母と桃は、切っても切り離せない關係にあると考えるのも良いだろう。しかし、關係とは得てして變動的な物である。生じるのも突然であれば、それが続いていくのも様々な事象が折り重なった末の偶然に過ぎない。西王母と桃の關係におい

て考えれば、「なぜこの二つが現代まで続く結びつきを得ることになったか」という疑問が生じよう。西王母と桃の關係はどこから始まり、なぜ現代まで続く關係を得たのか。西王母と桃について、数々の説話を考察し、神話・伝説的観点からその關係性を明確にしたい。

第一章 西王母

桃と関連付けられる前の西王母とはどのような存在であったのか。それを知るためには神仙思想と道教への理解が必要不可欠である。

神仙思想とは、中国において発生した起源の古い民間信仰の一つである。（中略）紀元前三―四世紀の周末の動亂期、いわゆる戦国時代は社会状態が不安定で、人々は塗炭の苦しみをなめたが、戦国の諸侯は却って富貴を極めた。しかし、彼らは富貴であればあるだけに、その勢力の増大を望む一方において、長生を体得していつまでもその富み栄えた生活の永続せんことを願った。この長生の術を体得させるものとして登場したのである。神仙思想である。

（下出積与『神仙思想』吉川弘文館、一九六八年 一頁より引用）

神仙思想は、中国の神話・伝説に大きな影響を及ぼしたと考えられ、それはもちろん今回の題材である西王母も例外ではない。神仙思想に強い影響を受けた道教において、女神として取り扱われる前（以後道教成立以前）と取り扱われた後（以後道教成立以後）で、西王母の姿形が大きく変化しているのである。

道教とは、神仙思想を起源の一つとする、古代の民間信仰を基盤として形成された中国固有の宗教である。不老長寿を主な目的とし、現世利益を求めるのを主眼としている。（なお、道家の思想と混同されがちであるが、両者の関係は非常に深くはあるのだが全く同じものではないことに留意しておきたい。）

以上を念頭に置いた上で「道教成立以前」と「道教成立以後」の二項に分けて、西王母に関する文献を追っていきたい。

まずは、道教成立以前の西王母について資料を用いて見ていく。道教成立以前から、西王母が道教において女神として扱われ始めたと思われる六朝時代までに西王母の名が見られる文献は、『爾雅』『山海経』『穆天子伝』『莊子』『淮南子』の五種である。上記文献における西王母の記載を、おおよその成立年代順に追っていく。

西王母という名の見られる最も古い文献であると考えられるのが、中国最古の類語・語釈辞典である『爾雅』。

觚竹、北戸、西王母、日下、之を四荒という。

『爾雅』においては、西王母（西）は、觚竹（北）、北戸（南）、日下（東）と並んで、四方の土地（もしくは国）の一つとされている、という見解が一般的である。しかし森三樹三郎氏は『古代支那神話』において、後に挙げる『淮南子』地形訓に見られる西王母に関する記述とともに挙げ、ここでは西王母という名の土地（もしくは国）ではなく、西王母の住まう国と言う「所在」を表しているのではないかと述べている。

次に『山海経』。『山海経』には洛陽を中心に地理・山脈・河川や物産・風俗のほか神話・伝説などが記されており、現代においては中国神話の重要な基礎資料となっている。西王母が地名以外で神として初めて文献に記されたのもこの書物と考えられる。西山経、海内北経、大荒西経の章にそれぞれ、

さらに西へ三百五十里、玉山といい、ここは西王母の住むところ。西王母はその状、人のように豹の尾、虎の歯でよく嘯き、おどろの髪に玉の勝をのせ、天の厲と五残を司る。

蛇巫の山の上に人がいて、杯をもつて東に向って立つ。西王母が几にもたれて勝と杖をのせている。その南に三羽（三足）の青い鳥（三青鳥）がいて、西王母のために食事をはこぶ。

西南の南、流沙のほとり、赤水の後、黒水の前に大きな山あり、名は崑崙の丘。神あり、人面で虎身、文あり、尾あり、みな白し、ここに住む。（中略）人あり、勝をあたまにのせ、虎の歯、豹の尾をもち、穴に住む。名は西王母。

と記されている。『山海経』に記された西王母像は、外観は人間の

顔で虎の牙と体と豹の尾をもつ半人半獣の怪物である。そして、その司るものは「天の厲と五残」すなわち天の災いと五刑（墨、鼻切り、足切り、宮刑、死刑）という、死神めいた畏怖すべき存在であったのである。

続いて戦国時代の魏王の墓から出土したとされ、周の五代の王、穆王が現在の中央アジアの地域にまで西遊した記録であり、中国最古の旅行記である『穆天子伝』では、

吉日甲子、天子は西王母に賓し、玄圭白璧を執り、以て西王母に見ゆ。（中略）西王母は又天子の為に吟じて曰はく、彼の西土に徂ぎ、爰に其の野に居る。虎豹は群を為し、於鵲は処を与にす。嘉命遷らず、我は惟れ帝女なり。彼は何の世民にして、又将に子を去らんとせん。笙を吹き簧を鼓し、中心翔翔たり。世民の子に之るは、唯れ天の望みなり、と。天子遂に駆りて崑山に升り、乃ち名跡を崑山の石に紀して、之に槐を樹え、眉して曰はく、西王母の山、と。

と、「我は惟れ帝女なり」と書かれているように、ここでは西王母は多くの獣とともに暮らす天帝の娘として描かれており、神性が付属されていることが分かる。なお、『穆天子伝』については明確な成立年代が不明なこともあり、前述した『山海経』に影響を受けている（あるいは与えている）可能性がある。

戦国時代の思想書であり、道家の根本思想を寓話を用いて説かれた『莊子』では大宋師篇において、

西王母は之を得て少広に座す。其の始めを知る無く、其の終わりを知るなし。

とあり、道の体得者たちとともに「いつ生まれいつ死ぬか分からない」不老不死の女神として名を連ねている。おそらく、道教以後の西王母像はここから得たものと考えられる。

最後に、最も後世に書かれたと考えられる『淮南子』の地形訓、覽冥訓に見られる西王母は、より神仙めいた姿となっている。

西王母は流沙の瀬に在り。

羿が不死の仙薬を西王母に請いうけたところ、妻の姪娥がそれを盗み出して月に逃げた。羿はこれを追いかけるでもなく、ただがっかりして茫然自失するのみであった。

地形訓においては『爾雅』の項において触れたように、西王母という名の土地もしくは国・あるいは所在が記され、覽冥訓においては西王母は不死の仙薬を持つ存在として書かれている。後者の伝説についてはそれ以前に参照する文献もなくいささか唐突な登場であるが、『淮南子』においてなぜ西王母が「不死の薬」を持つと考えられたかについては、『淮南子』成立時点で『莊子』に見られる神仙的な西王母像が広まっていたか、『山海経』の影響を多分に受けたか、あるいはその両方かのいずれかと考えられる。『山海経』の西王母が影響していると考えられる理由については、後の項目にて述べる。

次に、道教成立以後の西王母を見ていく。西王母が道教に取り込まれたのは六朝時代とされ、その姿形は「絶世の美女神」で統一されている。道教最上位の女神としてのその性質については、冒頭で述べたとおりである。

現在の西王母というと、その姿・性質については大抵道教成立以後の美しい女神としての西王母のことを指すと考えていいだろう。では、道教成立以後の西王母は民間に伝わる説話の中でどのような扱われているのか。

過偉氏は『中国女神の宇宙』において、西王母が関わる説話の中でも際立ったものを三つ挙げている。一に、『西遊記』において蟠桃会を行ったこと。二に、織女と牛郎の夫婦を別れさせたこと。三に末娘の七仙女（張七姐）と董永の夫婦を別れさせたことである。過偉氏が挙げたもののうち、ここでは二つ目の説話について見ていく。

これはいわゆる七夕伝説のことであるが、参考として以下、小南一郎氏が記した中国における一般的な西王母（王母娘娘）が関わる七夕伝説についての概要をお借りする。

一、 父母を失った若者（牛郎と呼ばれる）が、兄や兄嫁と一緒に暮らしていた。兄嫁は牛郎に辛くあたり、牛郎が友とするのは老牛だけであった。

二、 ある日、兄は牛郎に家産を分けて分居することを申しわたし、牛郎に壊れた車と老牛とだけを与えた。牛郎は家を出て、老牛と生活をした。

三、 ある夜、牛が突然、口をきいて言った。明日の夕方、山中

の湖で仙女たちが水浴びをするので、仙女たちが脱いだ衣服のうち、ピンク色のものを盗んで、林の中に隠れるように。衣服をなくした仙女は、あなたの妻となるであらう、と。

四、 牛郎は、牛の言うようにして、仙女を妻とした。その仙女は、天上の王母娘娘の外孫娘で、錦を織ることに巧みで、織女と呼ばれているのであった。

五、 牛郎と織女が結婚してから三年の月日がたち、男の子と女の子とが一人ずつ生まれた。

六、 ある日、老牛が涙を流しながら言った。自分はもう死ななければならない。自分が死んだあと、皮を取っておいて、緊急のことがあった時には、その皮を着るように、と。そう言いおわると、老牛は死んだ。

七、 織女が天上から逃亡したことを知った王母娘娘は、天兵を遣わして織女を捜させた。織女が牛郎のところにいることを知ると、牛郎が耕作に出ているすきに、王母が天からくだって、織女を連れ去った。

八、 それを知った牛郎は、牛の皮を着ると、二つの筐に子供たちを一人ずつ入れ、それを肩にかけ、織女を追って天に昇った。

九、 牛郎が、織女を連れ帰ろうとしている王母娘娘にもう少しで追いつきそうになったとき、王母は玉簪を抜いて後ろ手に線を引いた。それが天の河となつて、牛郎を隔てた。

十、 牛郎と織女とは天の河のそれぞれの岸辺にあつて、一緒にいることができず、彼らはそのまま牽牛星と織女星とに

なった。のちに王母娘娘は、二人が七月七日に会うことを許した。

十二、毎年七月七日には、鵲が集まって天の河に橋をかけ、牛郎と織女はその橋の上で会うのである。だからその日には、地上に鵲がほとんど見えなくなる。またその日の夜、葡萄棚の下にいと、牛郎と織女とが語りあっているのが聞こえる。

(小南一郎『西王母と七夕伝承』平凡社、一九九一年 三五頁より引用)

七夕伝説には様々な種類が見られ、西王母の孫娘である織女を娶るまでは同じであるがその後の展開が違うものや、西王母の役割が天帝に変わっているものがある。すなわち、七夕伝説における西王母は、天帝と同様に天兵を扱えるほどの権力を持った力の強い女神として考えられていたと言えよう。

以上、道教以前の西王母は土地あるいは国、半人半獣の恐ろしい怪物、天帝の娘、不老不死の女神、不死の薬を持つ存在として考えられ、道教成立以後の西王母は、多少の差異はあれども天上を統べる女神という統一した見解が見られる。このように主要な文献を引用しただけでも様々な姿形を有している西王母であるが、この変遷については諸説入り乱れている。参照する文献の多くが成立した年代が不明確なこともあり、いまだ正式な見解が出されていないのが現状である。

道教以前に西王母が不老不死であると明言しているものは『莊子』以外にはないにもかかわらず、彼女を取り巻く説話の多くに、不老不死が絡んでくるのはなぜか。おそらく、『山海経』の西王母が災いと五残を司っていることが影響していると考えられる。西王母は『山海経』において災いと五残という死の性質を司っていたことから、生の性質をも有していると考えられ、更にそれを自在に操ることのできる能力があると考えられたのであろう。そのため、『莊子』『淮南子』における西王母像は、『山海経』の西王母の性質を踏襲したものとも考えられる。

もとより不老不死の性質を持たなかった西王母は、『山海経』にて付属せられた「死」にまつわる性質の影響を経て、『莊子』成立時点で不老不死の女神として考えられ、『淮南子』成立時点で不死の薬を、すなわち不死を他人に与えることのできる力を持っていたと考えられていた。そして後に道教の女神として君臨するにあたり、更なる力を付属せられて、『莊子』と『淮南子』における描写を基点として、道教における不老不死の女神としての西王母が作られたのではない。

西王母が不老不死の性質をもつこととなったきっかけは、『山海経』にあると考える。

第二章 桃

中国において、桃は様々な性質を有していると考えられている。

古代中国人は、桃の酸味のある味から妊娠時のつわりを軽減させる薬効があることを知り、その種の中に人間の子供となる胚子が秘められていると思い込んだ。そのため、桃は結婚・出産の象徴とし

て考えられ、『詩經』『桃夭』をはじめ、古来多くの詩歌の題材とされてきた。それ以外にも、桃には魔を退ける力があると考えられ、中国においては現在でも正月に門に飾る「桃符」を代表に、桃に関連したさまざまな魔除け風習が存在する。もちろん、ただ結婚・出産の象徴や魔除けとして丁重に扱われるだけでない。中国には多くの「桃」と名のつく美人を意味する代名詞や、「桃」と名のつく桃を使用した料理がみられるなど、人々にとって桃とは非常に身近な果樹でもあった。

王秀文氏は桃の持つ性質について、『桃の民族誌―そのシンボリズム（一）』において「結婚・多産」「辟邪」「別世界との通路」「長寿」の四つに大別できるとした。その性質に一貫性が見られないのは、桃に関する文献や資料があまりに分散しているためである。

大きく四つに分類される桃の性質のうち、西王母と関わりの深い「長寿」の性質に着目したい。

桃の「長寿」の性質は、西王母と関わる以前ではほとんど見られない。『山海経』においても、西山経にそれらしい記述が見られるのみである。

ここ（渤沢）にはすばらしい果物がある。その実は桃のようで、葉は棗のようだ。黄色い花に赤い萼があり、これを食べると勞れない。

「勞れない」とあるだけで、まだ長寿の性質はない。以降、長寿にまつわる桃の姿が見られるのは、六朝時代に下ってからとなる。

『山海経』にならって地理異物を記している『神異経』においては、

東方有樹焉、高五十丈、葉長八尺、名曰桃。……食之令人益寿。
（東方に木があつて、高さは五十丈、葉は長さ八尺あり、名は桃という。（中略）食用すれば人の寿命を長くする。）

とあり、ここでは明確に桃が長寿をもたらすと考えられているのがわかる。

晋代までの遺事を記した『拾遺記』の卷三には、太さ百開程の一万年に一度実をつける桃の木の説話が、卷六には「王母の桃と王公の瓜をもし手に入れて食すことができれば、私は万歳に慣れるのに」と明帝の皇后が嘆いた記述が見られるが、ここですでに西王母と桃との繋がりが見られる。晋代以降に書かれたものは、西王母の名がなくともその影響を受けていると考えるべきであろう。

宋代の志怪小説集の『夷堅志』『続夷堅志』には、「章濤の妻である盧氏は、周囲の人には決して見えない、盆のように大きい桃を手ずから取って食すと、食わず飲まず夫と寝ず、触るだけで病気が直せるようになった。」「続夷堅志」【桃杯】には、「山の中を歩いていた韓道人が腕ほど大きな桃を見つけた。それを桃核の中身まで余さず食べた彼は、年が六十歳になっても四十歳の容貌であった。」という内容の怪奇譚がそれぞれ収められている。

西王母と関わる前の桃が「長寿」の性質を有しているとされたその嚆矢は、おそらく、すでに神仙説が浸透し、道教の女神として西王母が君臨していた時代に成立した『神異経』である。それまでは、

「辟邪」「結婚・多産」のイメージのほうが遙かに強かったようだ。桃が「長寿」の性質を得たのは、神仙説と関わってから、つまりは西王母と関わりを持ってからと考えられる。

第三章 西王母と桃

西王母と桃、それぞれの有する性質が民間へと伝わった流れを見てきたが、次はその二つが結びつけられた説話を見ていく。

西王母と桃が組み合わされた走りは、古代の伝聞、異境の奇物などを収録した『博物志』、漢の武帝が生まれて葬られるまでの雑事を記した『漢武故事』、それに少し遅れて道教色の強い『漢武内伝（漢武帝内伝）』。以上の三作であると考えられている。この三作は七月七日に漢の武帝が西王母の来訪を受け、会合の後に桃を賜う、という話の大筋は一致しているのだが、桃の数などに微妙な違いがみられる。以下、参考に『漢武故事』の概略を記す。

西王母は使者を遣わして漢の武帝に、七月七日に訪問するであろうことを告げさせた。さらに七月七日の正午の時には、西方から青い鳥がやって来て宮殿の前庭にとまった。東方朔に尋ねると、西王母がやって来るしるしであると言った。武帝は宮殿の中を清め、とばりをめぐらせ、外国産の香を焚き、九華燈をととして、王母を迎える準備をした。その夜、水時計が七刻を指すころ、雷鳴が聞こえ、天全体が紫色になると、紫雲の車に乗り、玉女たちに囲まれて、西王母が到着した。西王母は七勝を頭にいただき、雲のような青気を帯びて、二羽の青い鳥が左右に待っていた。武帝は、西王母を座にいざなうと、不死の

薬を求めた。西王母は不死の薬の名を列挙してそれを告げ知らせたが、武帝がまだ情欲を離れられないので、不死の薬を招き寄せることはできないと語った。西王母は七個の桃を取り出し、五個を武帝に与え、自分は二個を食べた。東方朔が朱鳥の窓から中を窺うと、王母は、東方朔が天上で悪事をなし、この世に流されたものであることを告げた。五更になり、西王母は帰って行った。

『博物志』『漢武故事』『漢武帝内伝』の三作において、西王母は桃と関連付けられることとなるが、なぜこの二つが関連づけられることと成ったか、その理由は定かではない。しかしこの唐突ともいえる結びつきは後世の西王母の在り方に多大な影響を与えた。特に不老不死の桃園の管理者としての西王母は、この説話を元に『西遊記』において創作され誕生したものと考えられる。

西王母と桃はその後『西遊記』を始めとした多くの小説に取り上げられることによって、その関係をより強固なものとしていったのである。

結び

西王母と桃が共に見られるもっとも古い文献は、先に述べたように『博物志』『漢武故事』の三作である。それ以前に、西王母と桃を関連付ける文献は見られない。では、なぜ『博物志』『漢武故事』において、突如西王母と桃は関連付けられることとなったのか。

西王母が『博物志』『漢武故事』において桃を持たされた理由は不明である。しかし結果として、「不老不死」の性質をもち『淮南子』

において不死の薬を持つていとされている西王母が、前提としてすでに幾つかの特殊な神聖を有している桃を持ち、「人間の寿命の極限まで生きられる」として他者に与えたという事象が意味を持ったのである。以降、西王母の桃（仙桃）＝不死の薬と言うイメージが定着し、それは袁珂氏の『中国の神話伝説（上）』を始めとした諸文献において「西王母の不死の薬は時代とともに桃へと変化した」と言う曖昧な表現を持つて扱われていた。

そもそも、西王母の持つ不死の薬とは仙桃のことなのか。結論から述べれば、私は不死の薬と仙桃は別物であり、なおかつ時代とともに変化したわけでもないと考ええる。

不死の薬と仙桃が同一視されるに至った理由は、西王母と桃が組み合わされたからに他ならない。『漢武故事』を見るに、本来、不死の薬は仙桃のことであるとは考えられていなかった。なぜなら、『漢武故事』において不死の薬を求める武帝をたしなめ「不死の薬を渡すことはできない」と明言しながらも、桃（この時点では仙桃という記述はないが、桃について西王母が「この桃は三千年に一度実をつけるので、下界で栽培するようなものではありませぬ。」と述べていることから、すでにその性質を有していると考えられる。）を分け与えているからである。『漢武故事』においては、会合の後、道士を百余人殺した武帝に使者を遣わし、その行為を戒めた後にまた三つの桃を分け与える。その後続く「これを食べれば人間の寿命の極限まで生きられます。」という使者の言葉から、西王母の桃は「長寿」の性質こそ有しているが、不死の薬ではないのは間違いない。これは『西遊記』にも言えることであり、孫悟空が不老不死になったのは西王母の桃園にあった仙桃を食しただけが原因ではな

いと考えられる。孫悟空は仙桃を食べた上で、太上老君の仙丹を食しているからである。孫悟空が不老不死になったのは仙桃だけの影響とは言えない。

『佩文韻府』によれば仙桃の名が初めて見られるのは、神怪不經の談が記され、唐代に成立した『西陽雜俎』であるとされる。それ以前に仙桃の名の見られないことから、仙桃という名称は唐代に創作された可能性が考えられる。「仙」という字はそれ自体が仙人の意をもっているため、西王母が道教において女神となり、桃と結びつけられたことで西王母が持つ桃に「仙」という字がつき、結果として西王母が持つ桃すべてが仙桃となったのではないか。仙桃は西王母が桃と組み合わせたことで生まれた副産物と考えられる。

西王母と桃の関係性が確立されたことにより、西王母の持ついたはずの不死の薬が消えたのは仙桃という明確な不老不死の象徴が生まれた宋代以降からと言えるため、不死の薬が仙桃に変化したという誤解が生まれるのは当然のことだろう。不死の薬が仙桃に時代とともに変化したというよりは、仙桃が不死の薬に突如成り代わったのである。その点、確かに「変化した」といえるかもしれないが、何度も言うように仙桃は決して不死の性質を有しているわけではない。そのため、西王母は桃と組み合わせられたことにより、その不老不死の力を一部失ったと言える。

西王母の仙桃は、別名「蟠桃」ともいわれることは前述したとおりである。蟠桃という桃の品種があるのは確かであるが、当然、これは西王母の持つ仙桃に由来する名であろう。それが蟠桃という名の由来ではない。では、蟠桃とはどこから来た名であり、西王母と

どのような関係であるのか。

中国の神話伝説において、何らかの呪力をもつ桃の木とは得てして巨大なものであった。それは『山海経』の度朔山伝説を始め、後世には『神異経』『拾遺記』『太上洞淵神呪経』にもその巨大で神聖な桃の木の姿が見受けられる。清代に編纂された『淵鑑類函』所引の『十州記』には「東海に山があり、度索山という。そこに大きな桃樹があり、屈盤すること数千里におよび、蟠桃という」という記述も見られることから、蟠桃とはこの神聖な巨木になる桃の実が起源といえるだろう。

では、なぜ蟠桃は西王母の持つ桃であるという考えが生まれたのか。これは前述した『山海経』など呪力を有する巨大な桃の木に関する説話と、『漢武故事』を始めとした仙桃に関する西王母説話とを合体させ、より西王母と桃の関係に説得力を持たせるため。あるいは、東に生まれた蟠桃を、西を治める西王母が持つことで陰陽が結合する、陰陽思想の影響があつたため生まれたものと思われる。

以上、神話・伝説の観点から西王母と桃の関係を見てきたが、最後に民間に受容された西王母と桃の関係についても言及しておこう。西王母と桃が積極的に関連づけられてきたのには、まず間違いなく『西遊記』の強い影響があると見て良いだろう。

『西遊記』は小説としては名作であるがゆえに、その影響力を見逃すことはできない。というのは、明清の時代に、西王母と蟠桃をもって長寿を祝い、またその蟠桃は天上から採ってきたもののだとするような要素が目立つてくるのは、いうまでもな

くわざと西王母の蟠桃会をまねたためだたい雰囲気を作り上げるためのものであるが、西王母と桃の信仰がこのようににわかに民間の基層にまで広がり、庶民化されたのは、小説の力によらなければ不可能でないかと思われる。

（王秀文「桃をめぐる蓬莱山・崑崙山・桃源郷の比較民俗学的研究」『国際日本研究センター紀要』『日本研究』第二二号、二〇〇〇年 九十頁より引用）

始めこそ幾つかの説話の中でしか見られなかった西王母と桃の関係は、『西遊記』ならびに蟠桃会を通してその関係が一般庶民にもわかりやすい形で浸透することで、今日も続く強い結びつきを得ることとなったのである。

参考文献

- 出石誠彦『支那神話伝説の研究』中央公論社、一九四三年
森三樹三郎『支那古代神話』大雅堂、一九四四年
下出積与『神仙思想』吉川弘文館、一九六八年
袁珂『中国古代神話2』みすず書房、一九七一年
水上静夫『花は紅・柳は緑』八坂書房、一九八三年
小南一郎『西王母と七夕伝承』平凡社、一九九一年
袁珂『中国の神話伝説（上）』青土社、一九九三年
王敏『花が語る中国の心―美女・美酒・美食の饗宴』中公新書、一九九八年

加藤千恵『不老不死の体―道教と「胎」の思想』大修館書店、二〇〇二年
過偉『中国女神の宇宙』勉誠出版、二〇〇九年
太田辰夫 鳥居久靖『中国古典文学大系31 西遊記』平凡社、一九七一年

近藤春雄『中国学芸大辞典』大修館書店、一九八七年

竹田晃 梶村永 他『中国古典小説選1』明治書院、二〇〇七年

斯波六郎「西王母伝説について」(東洋文化学会『東洋文化』第二二三号、一九四三年)

下斗米晟「西王母研究」(大東文科大學漢学会『大東文化大學漢学会誌』第九号、一九六九年)

納谷由美子「西王母伝承の変化について」(山形県立米沢女子短期大学『米沢国語国文』第二二二号、一九九四年)

王秀文「桃をめぐる蓬莱山・崑崙山・桃源郷の比較民俗学的研究」(国際日本研究センター紀要『日本研究』第二二二号、二〇〇〇年)

王秀文「桃の民族誌―そのシンボリズム(三)」(国際日本文化研究センター紀要『日本研究』第二二〇号、二〇〇〇年)

受贈雑誌(四)

国文学研究ノート

神戸大学研究ノートの会

国文学攷

広島大学国語国文学会

国文学試験

大正大学大学院文学研究科

国文学踏査

大正大学国文学会

国文学論考

都留文科大學国語国文学会

國文學論叢

龍谷大學國文學會

国文橋

京都橘大学日本語日本文学会

国文鶴見

鶴見大学日本文学会

国文論叢

神戸大学文学部国語国文学会

国文論藻

京都女子大学国文学会

古代研究

早稲田古代研究会

語文

大阪大学国語国文学会

語文

日本大学国文学会

語文研究

九州大学国語国文学会

語文と教育

鳴門教育大学国語教育学会

駒沢国文

駒沢大学文学部国文学研究室

佐賀大國文

佐賀大学教育学部国語国文学会

相模国文

相模女子大國文研究会

潮酒舍文庫研究所年報

潮酒舍文庫研究所

滋賀大國文

滋賀大國文学会

實踐國文學

実践国文学会